

より豊かな、高き目あてをのぞみながら

山 本 通 夫

今日、世界中の五十数ヶ国に及ぶ各地に二十一万数千余の日本人が在住しているといわれています。そして、そのうちの、ほぼ四分の一に当る五万一千余が、就学前の三〜五歳児から、中・高等学校学齢の十五〜十九歳までの、いわゆる「海外子女」と呼ばれていることもたちで、この「海外子女」のうち、三万五千六百二十三名（昭和五十八年五月一日現在、外務省調査）が、義務教育学齢期にあることもたちなのです。このこともたちは、それぞれの在住地の諸学校で、「学校教育」を受けています。全日制日本人学校（世界各地に七十四校設置されている）に在籍することもありますが、「現地学校」での教育を受けることもたち（一週一日、土曜日の数時間、「補習授業校」で学ぶこともできる。九十五校設置されている）も多くいます。義務教育学齢期のすべてという長期間にわたるものから、短いものでも二ヶ年弱、このこともたちは、「海外子女」として、「外国での学校教育」を受けざるをえないのです。そして、このようなこともたちは、今後、年々増加してゆく傾向をみせています。

さて、このこともたちが、海外在住を終えた父母に伴われて帰国してきます。昭和五十八年度には、九千五百三十名のこともたちが帰国してきたと報告されています。高等学校学齢期にあるも

のだけでも、一千名を越えるといわれています。これら、世界の各国、各地で異文化の中での生活を体験し、教育事情、社会的風土、習慣なども異なる環境の下で育った「帰国子女」たちを、そのまま受け入れ、国内教育体系への適応教育指導を行い、持ち帰ってきた異文化体験をより発展的に育成し、より豊かな国際感覚を身に具えた人材へと養成、伸長させてゆくことができる「帰国子女受け入れ専門校」の設置が、今日、時代の必要として世に求められています。

同志社国際高等学校は、この求めにこたえたものとして、学校法人同志社が設立したものです。

「帰国生徒受け入れ校としての同志社国際高等学校の設置準備について（昭和五十四年十二月）」のなかに、「学校設立の目的」について、つぎのように述べられています。

「本校は、新島襄いらいの、キリスト教を教育上の基本理念とした同志社教学の伝統を受け継ぎつつ、ますます相互関係を深めている国際化社会の要請にこたえ、多様な生活体験を持つ生徒たちを受け入れ、適切な教育を施し、豊かな国際性をそなえた有為の人材の育成を目的とする。」

同志社国際高等学校は、学校法人同志社の大教育体系のうちに包括された、同志社学内中・高群の五つの一つとして、全同志社一貫教育の一翼を担いうることできる学校としての教学体制の確立を図りながら、帰国子女受け入れ専門校としての責務を確実に果してゆける学校に、成長、発展してゆかなければなりません。

力弱く、貧しく、未熟ではあっても、「われらに備え、われらを守り、導きたもう」御神のみことろのままに、その目あてをのぞんで、懸命に前進してゆきたいと念願しているのです。

（同志社国際高等学校長）